二〇一一年五月一七日（参加者一六名）

屋敷町尽きて滝道鳥語降る　菜々
滝壺や禊のミスト総身に　〃
赤銅の岩も裂けよと滝しぶく　〃
日面に男滝女滝は木がくれに　〃
豪邸の片蔭ひろひ吟行す　〃
河蜻蛉吾子のリュックに止まりけり　ひかり
瀬の音に枝うち重ね若楓　〃
護摩堂の庇に苔や滝しぶく　〃
営業は土日と閉ざす滝見茶屋　〃
野仏の古りし前垂れ木下闇　ぽんこ
小祠は不動明王滝の道　〃
風薫る京花町を人力車　〃
夏舘ドーベルマンを侍らしめ　〃
老鶯の一声四囲の音消ゆる　せいじ
盤石を磨き磨きて滝落つる　〃
喘ぎつつ辿り着きたる滝涼し　〃
老鶯の声に一息岨の道　〃
岨道を過りて消へし黒揚羽　かれん
滝しぶき浴びて一句を拾ひけり　〃
とんぼ生れ影散らしをる水の上　〃
横文字の通用門は薔薇アーチ　宏虎

水の嵩瀬音で判る滝の道　〃
深山道つつじ彩る巌襖　わかば
河とんぼわが膝の上好みけり　〃
若人とあいさつ交はす夏山路　つくし
落石の注意札たつ滝の径　〃
堂涼し五百羅漢の在せりけり　明日香
磐座の守護神めける蝮草　〃
花楝一樹広ごる宿場跡　小袖
箒手に笑む地蔵尊夏落葉　〃
滝音に昨夜の疲れを癒さるる　満天
滝しぶき浴びて全身軽きこと　〃
寺院とも思へぬ館風炉点前　こすもす
首地蔵苦難の相に若葉風　うつぎ
朝採りの筍土の香に満つる　百合
滝の道立ち止まる度風涼し　はく子
岩を咬む木々の緑に谷深し　〃
滝ひとつ木の間がくれにもうひとつ　〃
滝道に入れば沢音絶ゆるなし　〃

定例句会みのる選

二〇一一年五月一七日（参加者一六名）